

《第6回国際シンポジウム報告1》 2004年7月10日(土)

セッションⅠ 〈日本〉への眼差し

秋 山 光 文*

江戸時代末における日本の開国政策により、欧米から多くの外国人たちがわが国を訪れ、それぞれの観点から日本の都市や名所、伝統文化や生活習慣に関する多くの言説を残している。また、日本に関する歴史・文学・言語・思想、芸術などを研究対象とした「日本学」(Japanology, japonologie)も、欧米ではすでに百年を超える伝統をもち、多くの研究者たちを輩出し、いくつかの研究機関や美術コレクションを生み出している。本セッションは、近世以降の日本が外の世界、すなわち外国人たちからどのように捉えられてきたのかを検証しようと試みられたものである。

研究発表には、本年6月から比較日本学研究センター専任教員となった本学のロール・シュワルツ＝アレナレス助教授、大学院博士後期課程の清水恵美子氏、ノートルダム清心女子大学教授の横山學氏の3名をお願いした。

シュワルツ助教授は「フランスにおける日本美術史研究」と題し、19世紀後期から始まったフランスでの「日本学」の伝統を、17世紀以来の「東洋学」の伝統から説き起こしながら概観し、とりわけ東洋美術史研究の宝庫ともいえるギメ美術館の設立に至る背景とその後の日本美術研究の展開を紹介した。ここで明らかにされたのは、フランスにおける「日本学」が、東洋の言語を習得する「東洋現代語学校」と東洋文学の教育を目的とする「フランス王立学院」の出身者によって始められ、さらに「日本美術

史」という学問領域が、言語、文学、歴史、思想研究に較べると本格的な研究が始まるのが遅かったこと、研究対象とされる作品が著名な蒐集家や日本美術の愛好家によりもたらされた、主に浮世絵、漆器、陶器など江戸時代に制作されたものが中心で、初期の仏教美術や絵巻などの絵画とする専門家が極めて少ないことなどの指摘であった。確かに、現在でもフランス人「日本学」研究者の多くが言語、文学、歴史、宗教を専門としており、こうした伝統を背景にしていることが理解されたとともに、平安時代の仏画を専門とする同助教授の今後の活躍を期待したい。

清水恵美子氏は、「アメリカ人画家の描いた日本のイメージ」との題目で、1886年に来日したアメリカ人画家ジョン・ラファージ John La Farge (1835-1910) の画業を通じ、彼が描いた「日本」について、残された画家自身の言説を含む文献資料から画家の制作意図を分析するものであった。ラファージの日本滞在は1886年7月2日から10月2日までの3ヶ月間という短い期間ではあったが、そのなかで1ヶ月間余を過ごした日光で多くの芸術的なインスピレーションを得たことが紹介された。帰国後に制作された作品には、その際に画家が目にした日光の景物や輪王寺の仏教尊像などのイメージソースが反映されているものの、いわゆる「ジャポニスム」的な表象として仕上げられていないと言う興味深い事実が指摘された。清水氏は、これを画家自身が日本の自然や宗教画像に「汎神論的共感」を抱いたためと結論づけ、これま

*お茶の水女子大学文教育学部教授

で紹介されることの少なかったアメリカ人画家について、新たな知見を提供した。

横山學氏の「イギリス人知日家特派員の伝えた日本」は、第2次世界大戦前から日本に滞在したイギリス人フランク・ホーレーを事例として、戦争によって敵国となった日本について、知日家のイギリス人がどのようなスタンスで同時代を過ごしてきたのかを、多くの資料を使いながら検証するものであった。とりわけ、日本の開戦とともに戦前に収集した希書や貴重書を含む「宝玲文庫」の蔵書16,000冊が敵産管理法によって日本政府に没収されたばかりでなく、自身も強制送還されるという悲劇を経験したにも拘わらず、戦後はザ・タイムズ紙東京支局長として再来日を果たし、占領政策が実施されて

復興する日本の状況をむしろ日本側の立場に立ちながら世界中に発信し、自らの思いを伝えようと試みる。しかしながら、彼の立場は日本で受け入れられず、「外国人」であることを理由に自分の業績や価値を素直に認めようとしなかった日本人の偏見に、強い不満を抱いていたことを明らかにした。日本が欧米と対立する時代にあつて、日本の文化を広く世界に紹介しようと試みたイギリス人の紹介を通じ、外国人研究者（あるいは知日家）と日本人との関わりに関し、再検討する必然性を提示する発表であった。

発表後の質疑応答も極めて活発で、今後はさらに他分野の外国人研究者を交えたセッションとして発展させたいと考えている。